

第8回全国被災地語り部

シンポジウムが開催されました

3月18日に、広川町民会館をメイン会場にして、「第8回全国被災地語り部シンポジウム in 和歌山」が開催されました。このシンポジウムは東日本大震災から5年目の平成28年に宮城県南三陸町で第1回が開催されました。大津波でたいへんな被害、犠牲者を出した大震災を風化させないように、あの災害を後世まで語り継ごうという発想だったと思います。南三陸町と阪神淡路大震災の神戸市、淡路市の3者が発起したものでした。奇数回は南三陸、偶数回は関西(第2回は淡路、4回は熊本、6回は神戸)というように開催されてきたのが、今回広川町ということでした。



山地久美子神戸大学特任准教授が実行委員長で、開会挨拶に続いて、西岡利記広川町長の歓迎挨拶がありました。

また、急遽来られた二階俊博代議士が祝辞を述べられ、防災に対する思いを話されました。

「200歳の語り部～巨大地震と津波を考える～」をテーマにしたパネルディスカッションでは、雲仙岳災害記念館、北淡震災記念公園、震災遺構・門脇小学校、稲むらの火の館の4人の館長が登壇し、人と防災未来センターディレクターのコーディネイトにより、討議がすすめられました。

東日本大震災の3月11日から1週間目の日という日程のため、東北の皆様には慰霊祭の準備等でたいへんご多忙のことだったと思います。そのような中でも、登壇者以外でも、東北からの参加

者も居ました。会場への全参加者も、次の大災害の時にはどうして被害を減らしたら良いのか、ということを実際に考えておられました。私たちは、いつも「津波被害者ゼロへの挑戦」を合言葉にしていますが、これを全国へ広めたいですね。

広川町の池田教育長と神戸のFMわいわいの金さんが、感想をコメントされました。

その後は、2つの分科会で、その1は「全国の災害語り部の取組みと歴史」では、広川町の日本遺産ガイドの佐々木さん。田辺市の浅里さんは昭和南海地震と紀伊半島大水害の2つのテーマで話されました。黒谷さんは阪神淡路大震災、伊藤さんは東日本大震災の語り部取組みを話されました。北淡震災公園の森さんのコーディネイト、関西学院大学の照本先生がコメントされました。

分科会2では、徳島県の中山さん、宮城県の阿部さん、和歌山県の山口さんと玉田さんが登壇され、幅広い話題も興味深いものがありました。

「全国被災地語り部和歌山宣言」発表で終了しました。大会運営に協力された、日本遺産ガイドの会、教育委員会の皆様お疲れさまでした。

拓殖大学濱口和久教授が客員研究員に就任



拓殖大学大学院特任教授・防災教育研究センター長で一般財団法人防災教育推進協会常務理事・事務局長の濱口和久氏に、「稲むらの火の館」の客員研究員

を委嘱いたしました。濱口教授から、客員研究員就任のお申し出をいただいたものです。

「稲むらの火の館」では、これまで第15回稲むらの火講座でご講演を、「濱口梧陵生誕200年記念の濱口梧陵学」へ御寄稿いただいたりと、御協力いただいています。今後益々御支援ご指導いただけるものとご期待申し上げます。4月4日、池田教育長から委嘱状をお渡しいたしました。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第25回 リスボン地震の教え

リスボン地震は、1755年11月1日午前9時30分過ぎに発生した巨大地震である。地震の約40分後には津波が襲い、ポルトガルや周辺国で甚大な被害が出た。発災した日はカトリックの祝日で、大勢の老若男女が教会に詰め掛けていた。礼拝中に落命した人も数多くいた。倒れた燭台が火元となり各地で大火災が発生し、1週間にわたって町を燃え尽くした。テージョ川沿いに建っていたリベイラ宮殿の他、オペラハウスや壮麗な貴族の館、総大司教座教会などが被害を受けた。広大な植民地帝国を築いたポルトガルの栄華は、わずか半世紀ほどで潰えてしまった。

ここまでは、多くの歴史書が示すと通りの顛末である。しかし、被災後の社会では、何が為されていたのか。江戸安政期、広村の濱口梧陵が為した偉業と類比するのもよいだろう。

ひとつは「上からの近代化」である。ポンバル侯爵の手によって推進された対応策は、たとえば、疫病の原因として恐れられていた死体の収容を命じ、被災者には食糧と仮の住居を与え、免税措置や治安措置を講じるなどであり、さらに、技術者を招集してリスボンの都市計画を立案させ、後にバイシャと呼ばれるようになる近代的な市街区を建設した。このとき地権者の権利は制限されて、勝手に建築することを認めなかったという。碁盤目状に整理された区画は、建物の規格を統一させ、教会さえも同じ高さにそろえさせた。

もうひとつの側面、「下からの近代化」も重要である。ヴォルテールとルソーの「神をめぐる論争」がよく知られているが、思想家カントの地震学がここにおいて深化したことも看過できない。

こうして足元のリスクを直視して、人間を中心に据えた理性的な社会が構想されるようになっていった。では、現代社会はその近代化の遺産を、どこまで自覚的に継承しているのだろうか。

全国被災地語り部 和歌山宣言

私たち「被災地語り部」は、安政の南海大地震津波時に命の灯・「稲むらの火」によって「逃げる道」を示し、多くの村民を救った濱口梧陵翁の功績を語り継ぐ和歌山県広川町に国内外から集い、各地の語り部の取組み、災害伝承施設の現状と課題について語り合いました。

閉会にあたり、「誰もが語り部」であり、災害の歴史、反省と教訓を積み重ね、未来の命を守るためここで得たことを伝え続けることをここに宣言します。

1. トルコ・シリア地震で多くの命が奪われました。南海トラフ巨大地震が予測される中、世界各地で自然災害が頻発しています。命を守り、一人ひとりを大切にし、郷土愛を育むため、積み重ねてきた経験と教訓を次の世代と隣の人に伝える取組みを続けます。
2. 8回のシンポジウムを経て、地域間に広がってきた緩やかな語り部交流ネットワークをさらに広げていきます。交流により多様な自然災害を学び、多様な手法で継承していきます。
3. 被災の経験を文字・音声・映像その他の手段により記録し、心に残る記憶を伝え、残し、災禍に遭う人を一人でも減らせるよう実践します。

自然環境や社会情勢の変化により、地元地域への理解を深めることがより大切になってきています。これからも発信方法を工夫し、災害伝承施設や地域資源を活かした活動を展開していきます。

第8回全国被災地語り部シンポジウム in 和歌山
広川町民会館において

2023年3月18日(土)

